

オノマトペ研究への前哨

橋本敬司

0 はじめにーオノマトペ研究への前哨ー

言語学において、オノマトペなどの音象徴語の研究は、その中心的テーマとはされず常に周縁部に追いやられていた。僅かに、エドワード・サピア¹⁾、ローマン・ヤーコブソン²⁾などに音象徴に関する論稿もあるにはあるが、それぞれの視点の相違によって、紡ぎ出された結論は同じものではない。日本においても、小林英夫の言語学的研究³⁾小嶋孝三郎の文学的研究⁴⁾があり、また金田一春彦は「日本語はもともと音節の組織が単純で、リズムの変化に乏しい。それを救うために、擬音語・擬態語は重要であるということは、童謡や民謡のはやし言葉を考えても明らかである。漫画などに見られるような品のないものは退けていいが、もっと我々はこの種のもを大切に、その活用を図ることを考えて良い」⁵⁾と論じたが、その研究の蓄積は必ずしも十分であるとは言えない。ところが、最近、オノマトペに焦点を当てさまざまな角度からの考察を試みた著作『オノマトペ・擬音・擬態語の楽園』（筧壽雄・田守育啓 勁草書房）が出版され、また、オノマトペの形態論的研究、統語論的研究などの論稿が発表されるようになり、十分とは言えないまでも、多少なりとも、オノマトペ研究に意が注がれてきたことを示している。

小論は、まずオノマトペ研究への前哨としてそのゼロレベルに立ち返るために、ソシュールの言語記号論における恣意性とオノマトペの有縁性（＝有契性）について確認し、次に日本においてオノマトペがどのように捉えられているのかを辞書の定義によって確認し、日本人研究者がオノマトペをどのように分析しているのかその変遷を概観してオノマトペの有縁性と身体性に言及し、次に現在どのような研究がなされているのかを概観し、最後に簡単に、最近の新聞、広告に見られるオノマトペによって、その身体性に触れてみたい。これは、現代のマンガ、新聞、雑誌、広告などのマスメディアに見られるオノマトペ、また多くの詩作品に顕著に見られる詩語としてのオノマトペなど、多様な装いに包まれ、自らを多様に変容させてゆく日本語のオノマトペを、この豊かなオノマトペを有する日本語の体系の中でどのように位置づけることができるのかという大胆な試みのための、ささやかではあるが戦略的な前哨である。

1 ソシュールの恣意性とオノマトペ

ソシュールは「われわれは概念と聴覚映像との結合を記号 (signe) とよぶ……われわれは、記号という語を、ぜんたいを示すために保存し、概念 (concept) と聴覚映像 (imageacoustique) をそれぞれ所記 (signifié) と能記 (signifiant) にかえることを、提唱する」⁶⁾と、

記号を能記と所記の結合であるとし、この言語記号の本質的条件である第一原理を「能記を所記に結びつける紐帯は、恣意的である、いいかえれば、記号とは能記と所記との連合から生じた全体を意味する以上、われわれはいつそうかんたんにいうことができる：言語記号は恣意的である」と能記と所記の結合の恣意性にあるとした。この恣意性について、能記は「無縁 (immotivé) である、つまり所記との関係において恣意的であり、これとは現実においてなんの自然的契合をももたない」として、能記と所記の自然的関連を完全に否定した。

ところが、この恣意性に対する反論を仮定して擬声語と感嘆詞の存在を取り上げ「能記の選択が必ずしも恣意的でないことをいおうとて、擬音語 (onomatopée) を盾にとることもできよう。しかしながらそれは決して言語体系の組織的要素ではない。その数からして存外僅少である……本式の擬音語 (glou-glou, tic-tac 型のもの) はどうかといえば、それらはただに少数であるのみならず、ある物音の近似的な・そしてすでに半ば制約的な模倣にすぎない以上、それらの選択はすでにいくぶんは恣意的である……なおまた、それらもひとたび言語のなかに導入されるや、他の語もこうむる音韻進化や形態進化などのなかにどのみち引きずり込まれる (参照, pigeon, これは俗ラテン語の pīpiō に由来するが、後者そのものは擬音語から生じた) : これは、それらがその最初の特質のいくぶんかを失ってほんらい無縁である言語記号一般の特質を具えるにいたったことの、明白な証拠である……擬音語と感嘆詞には、副次的重要性しかなく、それらの象徴的起源は、いくぶん議論の余地があるのである」と論じた。つまりソシュールは、まず擬声語を彼の考える言語体系を構成する要素ではなく、その言語体系では掬い取れない要素と考え、その非重要性と数の少なさを説く。またその発生起源において能記と所記の自然的有縁性を認めはするが、音韻進化・形態進化において一般記号化し、有縁性を失い恣意性を獲得するとした。しかしながら、まだ議論の余地は残るとしており、結局擬声語がソシュールの考える記号学の体系では捉え切れないことを白状している。⁷⁾

ソシュール言語学において、擬声語即ちオノマトペは、その言語記号の第一原理である能記と所記との恣意性の希薄さ故の有縁性と数の少なさから、その言語記号体系の構成要素とはみなされなかった。このことから、オノマトペ研究は言語学の周縁に追いやられ、また研究者もあまり多くを数えない。しかし、日本語のように多数のオノマトペを有する言語において、オノマトペがその記号体系を組織する要素とはならない、などと言うことができるのであろうか。聴覚映像＝音声と概念＝意味との間の関連性の有無を根本に据えて言語を捉えるソシュールの視点から、果たして日本語を構成する重要な要素であるオノマトペの本質に迫ることはできるのであろうか。おそらく答えは否であろう。われわれはこれに変わる新たな視点を見いださなければならないにもかかわらず、未だに見いださず得ていない。「オノマトペの楽園」⁸⁾といわれる日本語とそのオノマトペの特徴と本質に迫る新たな視点は、日本語のオノマトペそれ自体と日本語を対象にした研究以外に見いだすこ

とはできないであろう。

2 日本におけるオノマトペ解釈

a 辞書に見るオノマトペの解釈

日本では、オノマトペ即ち擬声語・擬態語はどのように捉えられているのであろうか。代表的な辞書の定義を見てみよう。

1 擬声語・擬態語（『国語学大辞典』東京堂出版）

記号とする語音と記号化の対象となる種々の事象（音響を明確に発するものから、何の音響も発しない状態のものまでさまざまであるが）との間に、ある種のつながり即ち音象徴（sound symbolism）が存在すると考えられる語の一群。

2 擬音語・擬態語（『日本語教育辞典』大修館書店）

生物の声や無生物の出す音を表す語を擬音語という。

動作・状態などを音で象徴的に表現する語を擬態語という。

3 擬声語（『国語学研究辞典』明治書院）

自然界で生ずる種々の音や声を言語音で模写した語の一群。ガタガタ・サブン・カアカアなど。一般語彙では、言語音と意味との間に、有縁的な関係がないが、擬声語は、擬態語とともに、言語音と意味との間に、有縁的な関係のあるのが特色。

擬態語

自然界に生起するさまざまな状態を言語音で模写した語の一群。

擬声^マえ擬態語ともに、言語音と意味との間に有縁的な関係があるが、擬声語は、自然界の音を言語音で直接的に模するのに対し、擬態語は、音を伴わない状態を、言語音で間接的に模するものであり、それだけ一般語彙に近い。

4 擬声語（『言語学大辞典』三省堂）

音声象徴（sound symbolism）によってつくられた語の一種。動物の声や自然界のもろもろの音、または、およそ物の発する音を模写したもの。

擬態語

音声象徴（sound symbolism）によって感覚・感情を写し出す一群の語。

5 擬音語・擬態語（『日本語百科大事典』大修館書店）

擬音語は、動物や人間など生物の発する声音……また、生物や物体が起こす物音自然界で発せられるさまざまな音響

擬態語は、……音響とは直接かかわりのないものを言語音によって象徴的に表現することばである。

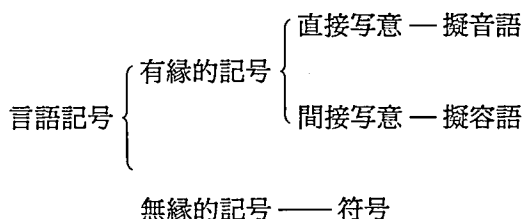
辞書では、基本的に擬声語（擬音語）・擬態語として項目が立てられ、それぞれ、自然音との関連の有無によって、自然の音を言語音によって捉えたものを擬声語、音ではない感覚あるいは状態を言語音を用いた音象徴によって表現したものを擬態語と分類しているが、

しかし擬声語と擬態語との共通項は、やはり音と意味との有縁性であって、『日本語百科大事典』では、「擬音語・擬態語の場合には、語の音と意味との間にある程度合理的な結びつきがあることが指摘されている」と明確に記している。つまり、ソシュールのいう言語記号の第一原理である恣意性を根拠に、聴覚映像と概念の間の自然的結びつきである有縁性においてオノマトペは捉えられているのである。

b オノマトペの言語学的分類と有縁性について

辞書は、以上のように擬声語・擬態語を解釈し定義づけしているが、言語学者などによれば、日本語の音象徴語即ちオノマトペは、擬声語・擬態語の二つの分類では簡単に割り切れないほど多様な特徴を備えている。そこで、言語学者がどのようにこれを分類したのか見てみたい。

まず小林英夫氏のオノマトペに関する考えを、「象徴音の研究」⁹⁾によって見てみよう。ソシュールの言語記号論を根拠にして、記号を一般的名称と捉え、そこに有縁的なもの (motivé) と無縁的なもの (immotivé) を識別し、「象徴なる語は有縁的記号と同義であるとみたい。擬音語と擬容語とはともに象徴である」と言う。従って、「擬音語と象徴語との間には実際上げんみつな区別を立てることはむずかしい。擬音語でありながらすでに心的状態を示すべく転用されることもあれば、象徴語でありながら自然音の連想が未だに歴然としているものもあるからである」と、その相互浸透性が説かれるのである。しかし、小林において、擬音語とは「語音をもって自然音を写そうとしたものであって、写される内容も写す手段もともに音響の世界である。……狭義のオノマトペ」であり、擬容語とは「ある種の態度を、自然音に相当する語音をもって類推的に、写したものである。狭義の象徴」であった。この狭義のオノマトペと狭義の象徴に分類された擬音語と擬容語は、いわゆる一般言語即ち符号とは明確に境界線があるとして、以下のように図示した。



ただし、擬容語に関しては、「一方にもっとも喚起的な記号を、他方にもっとも恣意的な記号を置いてみるならば、われわれの擬容語なるものはまさにその中間に位するであろう。そして両極の性質を、じじつ、分有しているのである」とされ、擬容語を、有縁的でありつつ無縁的であり、自然音を模写・模倣し類推すると共に、言語記号の第一原理である恣意性をも備えた言語記号と規定した。このように両義を備えた擬容語即ちオノマトペだからこそ、「オノマトペは原始創造なるがゆえに、言語にあらあらしい活力を供することがで

き」、また「オノマトペにおいても一記号一般のばあい同様に確立した慣用があってこそ、それらを破ったものが新鮮な表現力を発揮する。(この見地からのオノマトペの研究は文体論の仕事にぞくする。)」と言い、オノマトペの文学的立場からの研究の可能性の地平を開いたと言えるが、このことは、言語学的にみた場合必ずしも擬容語の概念規定を明確にさせたとは言い難い。オノマトペに関する小林の概念規定は、ソシュールの言語記号の恣意性という考えを越えるものではなかった。

この小林の考えに対し小嶋孝三郎氏は「オノマトペ研究序説」¹⁰⁾において「小林の有縁的記号説には、記号の〈有縁性〉とは何かという問題が残されている。この点が解明されない限り、オノマトペの本質は不問に付されたも同様であろう……具体的なオノマトペは、ソシュールのいわゆる〈恣意性〉だけで表現されないところに、〈有縁的記号〉としての数多くの問題が存在するのである」と断じ、自らの考える有縁性について以下のように説く。

〈有縁性〉とは、オノマトペの知的論理的側面（指示的記号としての意味）を条件としながらも他面、つまり感性的心理的側面（オノマトペの意味質）において〈ガクリ〉〈ガックリ〉〈ガクン〉などとは違った語音の聴覚的印象（意味量）を与えている。記号の論理的側面（無縁性）を越えて心理的側面をはたらかせ、単に状態だけでなしに、その程度までも暗示している。〈相対化〉とは記号の論理的形態（概念的意味）の心理的形態化（感性的意味の質量化）である。〈有縁性〉とは、単なる〈共感覚〉の作用ではなくて、このような論理的側面と心理的側面との調和乃至統一による相対化であり、オノマトペの意味質と意味量をして意味価たらしめる絶対化＝評価的形態と言えよう。¹¹⁾ 小嶋の言う有縁性とは、言語記号の持つ意味を心理的に形態化し感性的意味として質量化し、この意味質である感性的心理的側面と意味料である聴覚印象、即ち感性心性と音の間に見られるものであった。小嶋は、オノマトペに、単なる共感覚ではない自己の心理的感性的関与性としての具体性を見ているのである。言い換えれば、小嶋においては自己の心理的感性的体験として感じるものがオノマトペの有縁性であった。小嶋の有縁性理解の独創は、意味を心性感性という身体において受肉して、オノマトペをより人間存在に身近で切実な言葉として捉えたことにある。

ところで、オノマトペに、人間の心性感性を見だし分類したのは、金田一春彦氏の「擬音語・擬態語概説」¹²⁾においてであった。

擬音語…外界の音を写した言葉

擬音語…啄木鳥の声ではなく、木の幹をつつく音などの無生物の単なる音を表わすもの

擬声語…山羊の声、蛙の声などの生物の声を表わすもの

擬態語…音をたてないものを、音によって象徴的に表わす言葉

擬態語…無生物の状態を表わすもの

擬容語…生物の動作容態（状態）を表わすもの

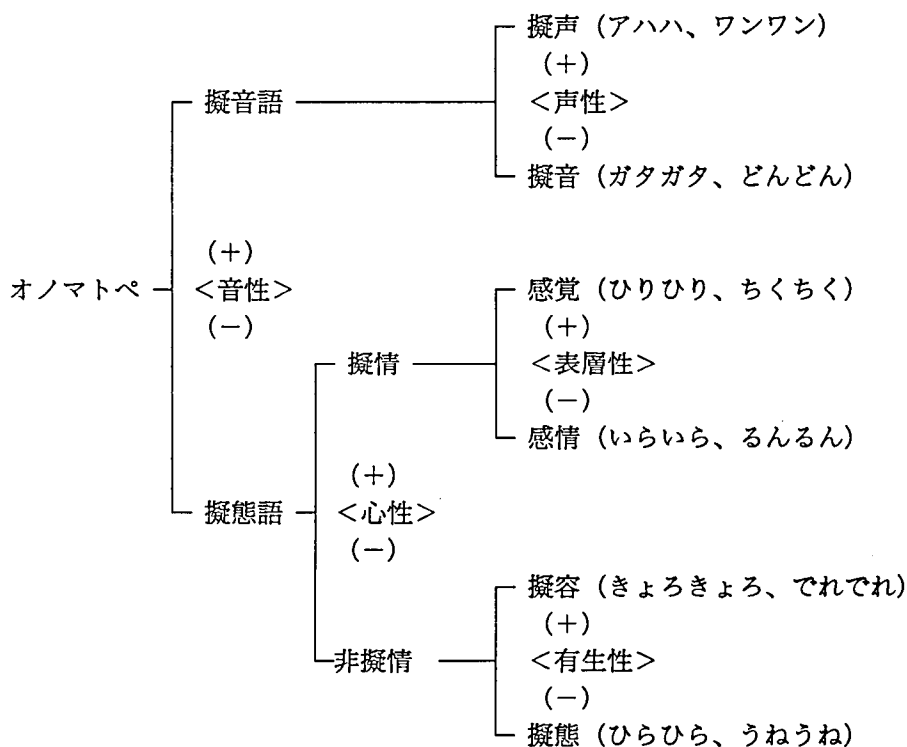
擬情語…人間の心の状態を表わすようなもの

この金田一氏の分類の背後にある考えは、無生物・生物・人というカテゴリーである。特に、擬態語の分類に特色が見られる。擬情語という概念を持ち出して来たところに、オノマトペの心性感性的側面を見いだしたことが窺える。

また乙政潤氏¹³⁾は、オノマトペを以下の4種類に類別している。まず、「自然の事象を真似る場合、その最も素朴な形式は対象の自然が発する音を言語音を使って模倣する」音模倣、そして「「ちらちら」や「ぞろぞろ」のように視覚の領域における感覚を言語音を使って聴覚の領域へ、あるいは、触覚の領域の現象を同じく言語音を使って聴覚の領域の現象へ写し替える」音模写、また「ジェスチュアとして成立する言語音」である音のジェスチュアの3種類に分類して、これらに、「事物の現象形態と言語音の間に何らかの関連を作り出している」と、その特徴を見だし、更に「言語の音に特定の感覚的な意味や感情的な意味が結びついているという印象を抱き……単語の音は単語の意味に合致しているのだとさえ思い込んでしまう」言葉を音象徴とした。音模倣、音模写、音のジェスチュア、音象徴の4種類に分類された、オノマトペ分類の特徴は、音のジェスチュアの考えにある。これはつまり、オノマトペに人の身振りを見いだしたことを意味している。心性感性から身体性へ、オノマトペ理解のパラダイムは確実に転換されていると言えよう。

氏は、このようなオノマトペを、「自然音の印象は、オノマトペになる際に、それぞれの言語の音韻論的、形態論的な組織へ組み入れて表現し直される……自然音のうちの目立つ音特徴だけがかなり恣意的に選び出されていて、それらの音特徴を再現する言語音で単語が造られているので、単語は必ずしも元の自然音の全体像を完全には表していない。……オノマトペといえども、言語記号として、記号の基本的特徴である「恣意性」を示している」と断じている。更にオノマトペの「音と意味とのあいだの関係は、このように音模写や音転写や音のジェスチュアや音象徴によって表現されるのであるが、このような領域は言語による表現のたいへん根元的な層をなす」(同上)と結論を下している。オノマトペに身体性を読み取った氏においては必然的帰結であるが、オノマトペは最も有縁的であると共に、恣意性をも兼ね備えた言語記号であった。氏は、オノマトペにおいて、言語記号の根源的有縁性である身体性と無縁性である恣意性との弁証法的関係を即ちオノマトペ自体のダイナミズムを見いだしたのであると言えないだろうか。

次に、『オノマトペ・擬音・擬態語の楽園』における分類を見てみよう。



この分類では、擬態語の分類に特徴がみられる。金田一の分類の擬情語を感覚（身体的なもの）と感情（心性感性的なもの）に分類し、感覚というカテゴリーにおいてオノマトペの身体性を見たところに、金田一との相違がある。しかし、擬態語分類の第一段階に心性の有無を軸にしたことは、金田一となんら変わるところはない。ところが、奇しくも心性の有無を軸に分離されたはずの感覚と擬容のオノマトペとして挙げられた例「ひりひり、ちくちく」と「きよろきよろ、でれでれ」に明確に表れているように、そこには身振り・動きといった身体性という共通性を見ることができる。また、擬態の「ひらひら、うねうね」も身体性を備えた言葉であることは明瞭である。更に言えば、感情に分類された「いらいら、るんるん」も心性だけではなく、その身体の不自然な緊張と軽快さといった身体性を備えていると言うことができる。われわれは、このような分類においても、明確にオノマトペの身体性を窺い知ることができる。

c 文化人類学者の視線

日本の言語学者によって、それぞれの視点から分類されたオノマトペを、文化人類学者である川田順造は、アフリカのモシ族の調査を比較対照の反射鏡にして、非常に鋭く確かな独自の理解を示している。長くなるが、以下に引用してみよう。¹⁴⁾

言語音のうちに、まず、I・概念化された意味によって伝達が行われる領域と、II・

音声の象徴性によって伝達が行われる領域とを区別するべきであろう。言うまでもなく、Iでは記号としての音と、それによって意味されるものとの関係が恣意的（無縁的）であるのに対し、IIでは言語音が、それによって表されるものと、より恣意性の少ない、動機づけられた（有縁的な）関係で結びあわされている。

このように川田は言語音を、まず恣意性と有縁性によってI一般言語とII音象徴に分類し、音象徴に関しては、更に次のように論じている。

IIはいわゆる擬音語、擬態語、擬情語、ヨーロッパ語で言語学者が ideophone（英）と呼ぶ表現の領域とかなりの程度対応する。しかし、この中にも、言語音と、それによって意味されるものとの関係の恣意性の大小によって、二つのレベルを区別すべきであろう。恣意性のより小さいものは、擬音語ないし狭義の onomatopoeia（英）である。擬音語においては、言語音と非言語音の関係は、ともに音であるために直接模倣的であり、よりつよく動機づけられている。勿論、言語音の音象徴性や音韻構造は言語によって異なるから、同一の非言語音でも、言語によって異なった言語音で表されることは多い。しかし、擬態語、擬情語、あるいは狭義の onomatopoeia を除く ideophone においては、言語音によって表される対象ではないから、直接の模倣はありえず、両者の音象徴性を通じて、かなりの程度恣意的に結びあわされることになる。

つまり、音象徴をその恣意性の大小によって二つに区別し、非言語音＝自然音と言語音との間の恣意性の小さいもの即ち有縁的であるものを擬音語、恣意性の大きいものを擬態語・擬情語とした。ところが、「擬」という文字が、音象徴を媒介として成りたっているこれらの語の本質を正しく表していない」として、次のように言っている。

日本語で擬音（声）語、擬態（容）語、擬情語などと呼ばれてきたものを一括して、私は「表象語」と呼ぶことにしたいと思う。……「表象語」という用語であれば、onomatopoeia の上位概念としてのヨーロッパ語の ideophone（英）、idéophone（仏）とも対応させることができるだろう。擬音（声）語は、「表音語」とし、擬態（容）語は擬情語も含めて「表容語」と呼ぶ

擬音（声）語、擬態（容）語、擬情語全体を「表象語」と呼び、更に、擬音（声）語は「表音語」、擬態（容）語と擬情語は併せて「表容語」とした。

また氏は、

表象語より、さらに意味作用から離れたものとして、ほとんど音声の直接の表情—音色やリズム—のもたらす感覚刺激だけに訴えるような、しかし間投詞とも区別される機能をもった、「音感語」とでも呼ぶべき範疇IIIを考えてみたい。

と述べて、音＝聴覚映像と意味＝概念との結合が言語記号であるとする考え方では捉えられない言語即ち音自体の持つ感覚の自己表現である言語記号即ち音感語の存在を提唱する。この例として「ズイズイズッコロバシ」（鬼定め歌）、「オジョンマジョンマ」、川上音二郎の「オッペケペー」を挙げているが、確かにこれらは音のおもしろさを音自体が自己表現

しているのであって、ここから何かの意味を読み取ろうとすることは全く無意味であろう。氏はこの音感語について「このような語における音声の役割は、音象徴性とかかわるものでありながら、表音語よりもっと直接の、非描写音楽において楽器音の果す役割と連続するものとして位置づけることができると思う」として、非描写音の楽器音に連続する音と考えている。しかし、この氏の言葉の最も重要な点は、感覚刺戟に訴えるだけの音声やリズムといった表情を備えた音それ自体の言語の存在を明らかにし、意味という呪縛から解放された言語理解の可能性の地平を開いたことである。音感語は音声やリズムという身体を備えており、また、この身体を持った音が刺激するのも人の身体であった。つまり、氏の音感語の考えは、人の身体から発した音が意味という過剰を捨て去りそれ自体の身体性を回復し、受容する人の身体を刺激し、受容者はそれを身体によってしか感受することはできないという構造を明らかにしたのである。この音の身体性は音感語において最も明瞭であるが、これは、表音語・表容語などの音象徴語においても身体を見いだすことができることを示唆するものであると言えよう。詩人谷川俊太郎は「オノマトペというのは、一番身体に即したことばだという気がするんです」¹⁵⁾と語っていた。このように、オノマトペの身体性を考えてゆくことが、オノマトペの本質に迫る最も有効にして魅力的な道ではないだろうか。¹⁶⁾

3 オノマトペの形態論的研究について

日本におけるオノマトペ研究は、『オノマトペ・擬音・擬態語の楽園』に明瞭にみられるように、形態論的研究、統語論的研究、文学的詩的言語としての研究、言語心理的研究、マスメディアにみられるオノマトペの研究、対照言語学的研究、日本語教育におけるオノマトペの研究、に大別することができるだろう。

ここでは形態論的研究のうちの音韻形態に関する研究について言及したい。小林英夫¹⁷⁾は「慣用化された日本語のオノマトペのなかに、日本人の感覚を見よう」とし、そのための方法として、以下の三か条を主張した。

- 1 資料は網羅しなければならぬ。気まぐれな選り好みをしてはならない。
- 2 研究者の個人的発明を加えてはならない。(研究者は詩人であってはならない。少なくとも詩人を中絶しなければならぬ。)
- 3 資料には使用例を加えることによって、その慣用性を証明しなくてはならない。

この原則に基づいて、小林はオノマトペを以下のように分類している。

一、集団的事実

A 語基一音節	(例)
a 長音延長反復	gègè
b 撥音延長反復	gangan
c 促音延長と付け	ki'to

B	語基二音節	
a	非延長反復	kirakira
b	撥音延長	katan
c	促音延長と付け	pita'to
C	語基二音節り延長	
a	非延長	pitari
b	促音延長	pi'tari
c	撥音延長	mandiri
二、散在的事実		
D	語基交替	tirahora
E	語基二音節延長と付け	
a	促音延長	do'kato
b	撥音延長	munzuto
F	ラ延長 (略)	zubora
G	二音節語	bita
H	三音節語	niyake
I	四音節語	zo'kon
J	六音節語 (2 × 3)	tunturuten
K	六音節語 (3 × 2)	sidoromodoro
L	八音節語	o'kanabi'kuri
M	接頭辞	tyoromakasu
N	接尾辞	huto'tyo

と21種類に分類した。これに基づいて、個々のオノマトペの用法と意味を列挙し、以下の結論を導き出した。

- 一 オノマトペにおいては、それらのおこさせる感覚刺激に、質と量がみとめられる。それらをいまそれぞれ、「意味質」「意味量」とよぶことにする。
- 二 オノマトペの母音の意味量は a o e u i のように大小づけることがある。子音の意味量は、無声音より有声音が大である。
- 三 一定の単音及び音節には一定の意味量に対応している。(このことはほんらいの指示記号には見られない。)
- 四 オノマトペにおける量質いずれともあれ音形態と意味価との対応は、日本語にみとめられたものをそのままの形で他の特有語にみとめることは期待できない。

小林においては、オノマトペの音韻のもつ意味に対する考察が深められている。つまりオノマトペの語基の母音と子音にみられる音の意味質と意味量更に意味価を見だし、意味をこのように三つのレベルで捉えたのである。

日本語オノマトペの語形による意味的特徴を明確にしたのは、田守（1993）である。氏は語基の数に基づいてオノマトペを分類し、「日本語のオノマトペは、大部分が一音節ないしは二音節の語基を持つものである」とし、また「単に一音節あるいは二音節だけから成るものは、きわめて稀で、普通、促音・撥音・「り」のいずれかを伴う。さもないと、母音が長音化されたり、音節が繰り返されたりする。このように、促音・撥音・「り」・母音の長音化・音節の反復を、日本語オノマトペの特徴として挙げることができる」と言い、促音・撥音・「り」・母音の長音化・音節の反復、それぞれの独自の意味について考察している。「ばたっ、ぼきっ、ぼとっ」など二音節の語基に付加された促音に「瞬時性・スピード感」、「ぼったり、がっくり、ぐったり」などの語中に挿入された促音に「強調」をみている。「かん、ばん、ぼん、ばたん、ぼきん、ぼとん」などの語末の撥音に「共鳴」をみ、語中の撥音は挿入辞とはみしていない。「ばたり、ぼきり、ぼとり」は「ばたっ、ぼきっ、ぼとっ」と比較してその「り」に「ゆったりした感じ」をみて、母音の長音化は、「自然界の物理的に長い音」の表現、また、「強調」をみた。反復に関しては「音や動作の繰り返しいしは連続」をみている。

これらの研究から言えることは、オノマトペの音は単なる言語音ではなくそれぞれが表情をもった音色であり、それを聞くものに対して、感覚的身体的刺激を与えるということである。その刺激が、音が本来備えた力であると考えられることを可能にするものであると言えよう。

4 終わりに—新聞・広告に見られるオノマトペ

最近の新聞と広告に、以下のようなオノマトペがみられた。

1 新聞記事

- ホットひと息、茶の湯体験（朝日新聞1995年11月19日三面記事）
- 安芸島2敗 貴ヒヤリ（中国新聞1995年11月20日スポーツ）
- 貴花、2敗でピタリ（中国新聞1995年11月23日スポーツ）
- うまみ成分たっぷり（中国新聞1995年11月20日ふぁみりー）
- ぶらり街歩き（中国新聞1995年11月19日東広島）

2 広告

- カルシウムが不足すると、イライラします。イライラに牛乳。(J-Milk)
- パリッと真面目なチノパンツ。(EDWIN)
- ファイト、ぎっしり。リポビタミンD
- 久しぶりに、ドキドキするカメラ。誕生。(PENTAX)
- どんどんいける、爽快ラガー（キリンラガーウインタークラブ）
- 私にドンピシャ。(三菱自動車 minica toppo)
- だれだって、つい・・・うっかりもあります。(JR 西日本)

ここに見られるオノマトペの擬音語、擬態語の別を『擬音語・擬態語の読本』によって分類すると、「ホット（音、態）、ヒヤリ（態）、ピタリ（態）、たっぷり（態）、ぶらり（態）、イライラ（態）、パリッ（音）、ぎっしり（態）、ドキドキ（音、態）、どんどん（態）、ドンピシャ（態）、うっかり（態）」となり、「ホット、ドキドキ」はその区別が難しく、擬音語と擬態語どちらでもあり、一方に限定することはできない。それは一体何故か。つまり、擬音語と擬態語には、共通性が存在することを意味している。この共通性について『擬音語・擬態語の読本』によって考えてみよう。たとえば、「ホッ」は「太く短い息を…ひと息つくさま。また、ためいきをつく音やさま」であり、そこには人間の表情を感受することができる。また、擬音語に分類された「パリッ」は「材質の薄いものを…はがす音。「ぱりっ」より、やや粘着力が弱い感じ」であるが、この広告の「パリッ」は擬態語であり、皺の無いきっちりしたチノパンツの表情とそれをはいた人のきっちりした態度を感受することができる。このように、上記引用の全てのオノマトペから、われわれが感受できるものは、人の体のさまざまな動き生き生きとした表情である身体性に他ならない。このことはオノマトペの根源にあるもの、それが身体であることを示していると言えよう。

このように、言語記号としてのオノマトペが備えた有縁性とは音と意味のそれではなく、音と身体との有縁性であったとすることができる。今後の課題は、更にオノマトペ及び言語記号をさまざまな角度から考察し、オノマトペの身体性について一層明確にしてゆきたい。これを明らかにすることは、オノマトペ自体の身体性に迫ることにまで発展してゆくであろう。

注

- 1) 「言語」紀伊國屋書店、「音象徴」（『言語・文化・パーソナリティーサピア言語文化論集一』北星堂出版 所収）
- 2) 「言語音形論」岩波書店、「音韻論」（『一般言語学』みすず書房出版 所収）
- 3) 「象徴の研究へ」「国語象徴音の研究」「擬音語と擬容語」、「言語美学論考」（『小林英夫著作集』5 みすず書房 所収）
- 4) 『現代文学とオノマトペ』桜楓社
- 5) 「擬音語・擬態語概説」「擬音語・擬態語辞典」浅野鶴子編 角川書店
- 6) ソシュール『一般言語学講義』小林英夫訳 岩波書店
- 7) また、別のところでソシュールは、「記号の恣意性の根本原理は、おのおのの言語において、徹底的に恣意的なもの、すなわち無縁のものと、相対的にしかそうでないものとを、区別することを妨げない。絶対的に恣意的なのは、記号の一部のみである；その他にあっては、恣意性を排除するわけではないが、そこに程度を認めうるような現象が介入する：記号は相対的に有縁化されうるのである……同一言語の内部にあっては、すべて進化の運動は、これを有縁から恣意へ、恣意から有縁への連続的移行をもってしるすことができる」として、記号の恣意性即ち無縁性と

相対的有縁性の存在とその交通＝関係性はそれぞれの言語体系に内在するダイナミズムであると論じている。J.カラーはこれを「二次的有契性」としている。「ソシユール」岩波書店 J.カラー

- 8) 『オノマトピア・擬声語・擬態語の楽園』 笈壽雄・田守育啓
- 9) 『小林英夫著作集』 第5巻所収
- 10) 『立命館文学』 9 1970 小嶋孝三郎
- 11) 「擬音語と擬容語」(『言語生活』 433号 1987 12月号)
 - 一 オノマトペにおいては、それらのおこさせる感覚刺激に、質と量がみとめられる。それらはいまそれぞれ、「意味質」「意味量」とよぶことにする。
 - 二 オノマトペの母音の意味量はa o e u iのように大小づけることがある。子音の意味量は、無声音より有声音が大である。
 - 三 一定の単音及び音節には一定の意味量が対応している。(このことはほんらいの指示記号には見られない。)
 - 四 オノマトペにおける量質いずれともあれ音形態と意味価との対応は、日本語にみとめられたものをそのままの形で他の特有語にみとめることは期待できない。
- 12) 『擬音語・擬態語辞典』 浅野鶴子編、角川書店 1978
- 13) 乙政氏の引用は全て、以下の論稿による。「オノマトペ概説－オノマトペ総論」(『日本語のオノマトペ－食べる音や様子を中心に－(解説書)』 大阪外国語大学AV技法研究会 1995)
- 14) 以下の引用は全て川田順造の「口頭伝承論」河出書房新社による。
- 15) 「内なるリズム・ひびくことば」 谷川俊太郎＋俵万智＋山口幸洋＋佐藤亮一 (『言語生活』 433号 1987 12月号)
- 16) 北村弘明氏の「日本語オノマトペの有縁性について」(『青山学院大学文学部紀要』 29号 所収)、拙稿「オノマトペのカー詩語としてのオノマトペー」(『表現研究』 62号 1995 所収) 参照
- 17) 注11参照

辞書類

- 『擬音語・擬態語辞典』 浅野鶴子編 角川書店 (解説金田一春彦)
『擬音語・擬態語辞典』 天沼寧 東京堂出版 (擬音語・擬態語について)
『擬音語・擬態語の読本』 小学館

参考図書

- 『一般言語学講義』 ソシユール 小林英夫訳 岩波書店
『擬声語の研究』 大坪併治 明治書院
『ソシユール』 J.カラー 川本茂雄訳 岩波書店

- 『オノマトピア・擬音・擬態語の楽園』 笈壽雄・田守育啓 勁草書房
 『聲』 川田順造 筑摩書房
 『言語』 エドワード・サピア 紀伊國屋書店
 『言語音声論』 R.ヤコーブソン 岩波書店
 『現代文学とオノマトペ』 小嶋孝三郎 桜楓社

参考文献

- 小林英夫 言語美学論考（『小林英夫著作集』第5巻 所収）
 日向茂男 オノマトペの魅力（『月刊言語』1993 巻22-6号 所収）
 石黒広昭 オノマトペの「発生」（同上）
 笈 壽雄 一般語彙となったオノマトペ（同上）
 ローレンス・スコウラップ 日・英オノマトペの対照研究（同上）
 松本治弥／加藤宏明 「パウワウ」か「ワンワン」か（同上）
 田守育啓 日本語オノマトペの音韻・形態的特徴（同上）
 柏木 博 オノマトペ的なものを生み出す消費文化（同上）
 馬場雄二 目で見るオノマトペ（同上）
 堀井令以知 擬音語・擬態語の言語学（『日本語学』1986 7月号 所収）
 山口仲美 古典の擬音語・擬態語－掛詞式の用法を中心に－（同上）
 青山秀夫 朝鮮語の擬音語・擬態語（同上）
 松本 昭 中国語の擬音語・擬態語（同上）
 笈 壽雄 英語の擬音語・擬態語－主として日本語の対比において－（同上）
 安居總子 子どもたちの擬音語擬態語（同上）
 日向茂男 マンガの擬音語・擬態語(1)（同上）
 田守育啓 オノマトペをめぐって（『月刊言語』1989 11月号 所収）
 谷川俊太郎＋俵万智＋山口幸洋＋佐藤亮一 内なるリズム・ひびくことば（『言語生活』1987 12月号 433号）
 日向茂男 擬音語・擬態語（『講座日本語と日本語教育』所収）
 宮地 裕 擬音語擬態語の形態論少考（『国語学』115 所収）
 菅野裕臣 オノマトペの響きく豊かな語彙と音>（『月刊言語』1986 11号 所収）
 エリニア H. ジョーデン 擬声語・擬態語と英語（『日英語比較講座』第4巻 所収）
 那須明夫 オノマトペに現れる促音について（『言語学論叢』第13号 1994 所収）
 楊 淑雲 「擬態語＋する／なる」の形式について（『日本語学科論集』第3号 1993 所収）
 森田雅子 語音結合の型より見た擬音語・擬容語－その歴史的推移について－（『国語と国語文学』30-1 1953年 1月号 所収）
 福岡康子 マンガにみる擬音語・擬態語の特異性について（『九州大学留学生センター紀要』第5

号 1993 所収)

小林英夫 擬音語と擬容語 (『言語生活』1965 12月号 所収)

石垣幸雄 擬音語・擬態語の語構成と語形変化 (同上)

都竹通年雄 方言の擬声語・擬態語 (同上)

小島孝三郎 詩人とオノマトペ (同上)

鈴木雅子 むかしの擬声語・擬態語 (同上)

上村幸雄 音声の表象性について (同上)

玉村文郎 日本語の音象徴語の特徴とその教育 (『日本語教育』68号 1989 所収)

天沼 寧 擬音語・擬態語 (同上)

阿刀田稔子・星野和子 日本語教材としての音象徴語 (同上)

大谷洋子 擬態語の特徴 (同上)

許 卿姫 日・韓両言語における音象徴語の比較対照的研究 (同上)

生越まり子 日本語の擬音・擬態語教授上の問題点 (同上)

金 慕箴 中国における日本語の擬音語・擬態語の教育について (同上)

大西晴彦 タイ語の擬音語 (同上)

松田徳一郎 英語と日本語の擬音語・擬態語 (同上)

高橋友子 擬声語・擬態語の一考察 (『九州大学留学生センター紀要』第6号 1994 所収)

加藤 弘 擬態語の形態について (『東北大学日本語教育研究論集』第7号 1992 所収)

仙波純子 擬音語・擬態語についての一考察－日仏対照研究－ (『講座日本語教育』第25分冊 所収)

星野和子 擬態語の用法－構文論の観点から－ (『講座日本語教育』第26分冊 所収)

北村弘明 日本語オノマトペの有縁性について (『青山学院大学文学部紀要』29号 1987 所収)

橋本敬司 オノマトペの力－詩語としてのオノマトペ－ (『表現研究』62号 1995 所収)